鹿狩

十月十八日晝八ツ時頃本の本陣より約一里の隣村大泊村より山中に大熊顯れたりと報しあるに八面白く熊狩して兵を練らん横先ぶつりに今や休廳出發せんとす屬僚及び兵隊と共に本の本陣と越へ大泊村に到る具に問へば一昨日捕夫か見及たる由夫れも五十町の奥山也と云ふ狐と馬に乘きたる如く吾亦迂闊の責ありされど今更徒爾に分とも遺憾甚既に暮し一泊して明曉鹿狩八如何と最大に賛同し依て里四方より投宿各員の下宿を命じ兵隊にも勢揃早俄人小村の山家不意の迷惑を掛けざる樣面に野陣心得轉寝無論唯飢渴を凌く丈けと覺悟をし村方に八有合の麥芋にて賄の他に手數を労せしうるに堅く制して狩場の準備を命じたり翌曉幸に好晴持曉より揚出し山に入る江戸者の事臆の偖初めての事なれ諸事村方巧者の手配に任せたるに狩場八四谷受持本留場六ケ所夫々の部署を定め猟夫猟犬八近村より集め来りと也霜冰る山風冷気肌を徹し頓て朝暾峯に輝き来て微暗黄昏に眠を催せ而の也四境寂寞更に音なく無聊に苦しむ暫して狩出しの物声響き砲声も聞へ遥の麓里の方に當り兵士村民雲の如く馳遥ふと雖見聞もなく一丈餘り来て唯今妻鹿一頭逸走したりと持場の裏手洩し林中に潜みたる丈追い出し皆に伏きたれバ人に集り撃ち振候に注進を扱吾が持場八何の風情もなく唯山籟の音のみ徒億憶したり日既に午時腰兵糧抜きて元気付け手藥煙引て待間他の持場に大鹿顯れ出猟犬驀進夫れ迫ると山上山下をめき叫んで狩り立大示猟り掛て噬ミ付たる鹿八狂ひ逸し遂に吾が持場に来る偖屬片山某八遥に岩より配い下り手早く一發せるに狙ひ違ひ見事に手留め功名第一を博せり既に二頭の獲物あれバ狩猟の價値満足先づ是にて終了と告げ一本日の功目的の兵隊に帰陣せしに大と文吏に帰を〜八少く遺憾暴竟実地に不則狼狽を免れさり〜かるに笑評山を下り里正の件に小越〜二頭の獲物を真先に多猟犬五頭を牽き兵員列を正し意気揚々本の本に凱旋直ちに獲物を調理せしめ百僚兵士一同と大會して慰労の宴を開き農夫猟犬迄大番振廻ひに鯨飲飽食興味斜ならさりき

跡を聞く處村正村役人共申付に不拘病人を四方八方に走らせ本の本初の夜具布團膳椀行燈迄も文覺し来り上を下へと大騒動せしは是非なし村費に課せん事恐れ貴を衛し一切の費用を私金四十両と無一たり又鹿皮八紙念に八幡黒に鞘し染の義付袴と製せんと欲する革を取扱ふ八識多に限る本宮組に功者の識多ありと仍て特に二人を呼び下し市中識多に宿を〜もし者一人も有〜有止廳中の雜物屋に数日間宿食せしめ大夫一式金幣の良袴と得たり併し識多と火食を共にせしに而大に異の婦人を受けしに子小毒に人推同等主義なり後三年目改府八果して識多昨人を平民に入籍をしめられたり

鹿狩

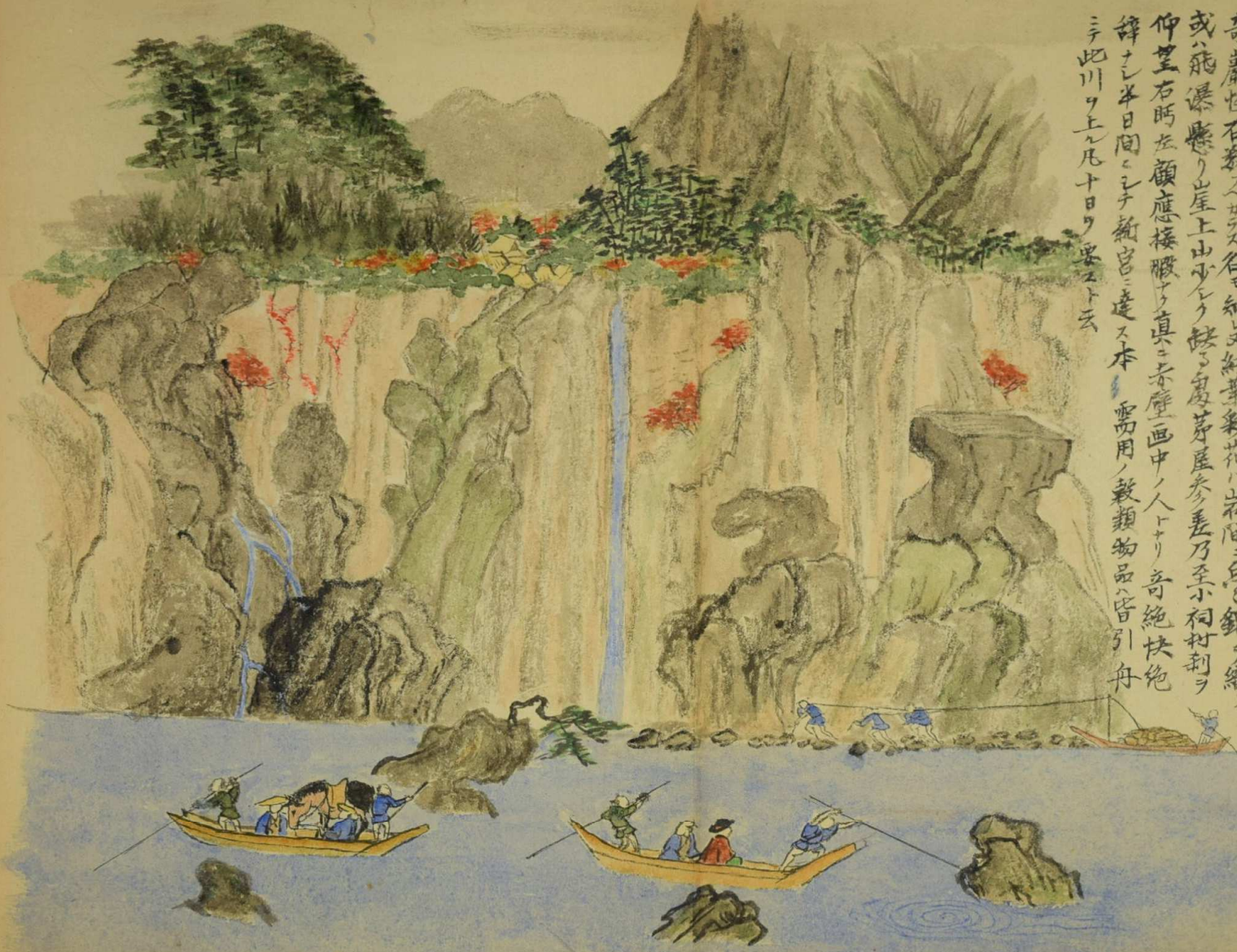
熊野の大熊

木の本廠より東十二三里相賀組内奥河内村辺に大熊現れしとの注進に猟師を命じたる獵夫山分に深入捜索跡を踪て追い行き遂に五人にて矢を入れ首尾能く手留たりしに庄屋所添廠へ擔荷し来る頭に巨大目方廿三貫目解剖をしひたる膳四人分を得たり僚属と共に肉を味い討ふる猪鹿に優るとせしかたし手留のしより十二日を経て乃ち有名の掌を除ふる最も美味皆同歯ト立ル盃子我を驚くの感あり熊胆の名いうとも従来稀有の事蓋し大熊屋山辺より紛れ出しかと獵夫いつり五人の賜夫十日の食を携へ深山に分け入り盡力の由聞たれば私金四十円を與へぬ

椿實（ドングリ）食用

熊野本宮組巡視の時大庄屋岩崎仲之衛門と
りふ宿にて晩餐の膳上飯なく椀蒸芋の巨塊を
盛る好味類なり〜偶ま次室の架上茶袋様の物
多くあり何品ぞと問ふに仲之衛門説をなして曰く

此地米なく吾々常食八芋の葉乃至
他の雑菜と骨董煎と食を御奉
行の事格別に芋のみと供せしも御逆
恩恵なるに免し給へ扨彼の袋に椿実
の粉なりて麥芋菓蕚雑菜喰ひ盡
したる時の不虞に備ふるの本年の如
き米價暴騰食全く缺乏故爭て椿実
を拾ひ近山に既に盡し遠く三四里の深
山に分け入り拾ふ若し買い求むれば一升の
價三百文と要すと云く其製法を問へば
皮のまま樽に入数十日間谷川の流に浸し
らく渋を抜き干して皮を去り去り砕き
桶に入再び谷川に晒し一日に三四回攪反
水を取替ふる事四日計後干乾し挽て粉と
なし蕎麦喰様に水を捏ち團子と粥に入れ
又は中く解き焼餅なたり〜焼餅となし食
せと予に袋を請ひ帰本如説なし試食し
たるに一口も咽に下らざりき此他北山組毒山谷
に杉実を餅となし食せ是も試みたるに無理からぬ食せと〜又リョウブナと木
の芽其他草木の芽を蒸し乾し食せら行り如何に僻地と雖も人間の食
まつ〜ろ物を食悲惨思ふべし



九里峡

熊野本宮より新宮に下る九里八町の熊野川にて絶勝の名高し本宮巡視の帰途舟行せ碧潭
偶旋巨岩點々最も危険の処舟子巧に棹を操り舟輕色に廻り急下矢の如し両岸断崖
数十丈緑樹峡を壓して天僅に一帯の青布を流す基盤、姐、屏風、虎、達、麝、等名称の
奇巖怪石数えべからず名も知れず紅葉彩花は岩間に点々錦を織り
或は瀑懸り崖上山少しく鬱る處茅屋参差乃至小祠村刺を
仰望右眄左顧應接暇なく真に赤壁画中の人となり奇絶快絶
辞すべし半日間にして新宮に達す本邦需用の穀類物品は皆引舟
にて此川を上る凡十日を要すと云

石の菜園

熊野新宮より那智へ向ふ
途中宇久井の濱とふ所より菜
園悉くふ石と畝作りて一掬の土
砂を見ざ而のみ蘿蔔歴々
突出肥大也一奇と思ひ下馬し
て農夫に問へば石の膏にて
生育別に施肥をなして如斯
抜き取るとり此邊の畑皆
同じ農夫の言理なるものの
るや如何

那智山三瀑

那智瀑ハ口熊野天満浦より一里許、那智山権現社の側に在り瀧に於てハ日本第一と〻富山嶽と共に絶勝の名天下に聞けり予ハ新宮の坂社に巡詣、瀧壺に近つき仰望するに直下六尺七十丈百雷乾坤に震い須臾に雲烟去来変幻無量奇絶怪絶名状すべからず両崖ハ大岩裸々千仞一面す木を見ず唯七合目あたりに孤松蔦蔓錦を織り花泉に映じ異彩愛すべし昔て家翁の言に瀧見堂（瀧を臨む）大杉森に隠れて瀧壺を親ふべからずと聞くに今や瀑潭露出、唯大岩磊々重畳花泉分之を縫い潜て天満川に落つ昔内者より問へば往年震災の時巌落下如斯高層に成る大樹ハ既に伐木せと頗る山霊を瀆せの感あり従来紀州の画工此瀑を写正の者多きも是ぞ真ハ迚も認むるめ〻近時往々新聞紙上に写真を掲ぐるあり兎角茫漠模糊全体を解明ならしめず蓋し雄大壮厳の神蘊霊秘ハ到底人為の不可及的か是北瀑の瀑たる所以なる乎凄愴襲い来て久〻佇むつゝ是と一の瀧の光景也

二の瀧三の瀧

安内者に誘はれ一の瀑壺ぬ左方道を峻坂に取り藤蔦を捉り巌角を攀ぢ屈登彼数町樹蔭なる峻崖上花山院法皇御修法の旧跡と云ふ一箇の空石櫃と安置す昔ハ一小瀧と白蛇が棲しと傳へ〻又登り上て辛ふして山頂に達せ谷行くこと〻なる元始的深林中一帯の川の瀧口実検の好奇心抑るべ川に入り岸を辿り蔓蔦又枝垂木を捉り徐に歩を進むるに薬研形の出岩底千年の苔深く滑まして足止まらず危険股栗戦々兢々数十歩漸く瀧口に到る家僕岩後帯を捉り一人又其腰を引き恐る〻臨む両岸の水浸蝕し跡凡八間許目下減水巨間許に中央に出岩現れたり巻きまれんやと疑視し得ずして却歩右に渉りた、越へ岩を踏み水に入り河畔山脚を迂回して二の瀧に達せ河中に巨岩坦々数人を容るべき有て瀑正面に光年を登て喘息一休観瀑せば高さ十間許に斜流巾七八間瀑潭廣闊小池を為し深緑翠璃の如く直立なるべし和称して壮大閑寂一鳥鳴の処優美雅趣真に別天地を為す頃て又峻崖を攀ぢ層巒山量々を抱き樹枝を縋り荊棘を潜り或ハ潜り二町許三の瀧に到る此処懸崖絶壁山神観音を祀る如し樹枝を分に岩角を抱き俯仰せば滝巾ハ二の瀧ハ伯仲せれども直下急奔花驚目眩んと丈ケ知へ〻唯偉壮也紫内面ふ坂上流山又山を登ぶとは高無数の奇瀑あり〻促せざれと三瀑既に足れり仏上神秘を瀆せ〻下山せり嗚呼三瀑の神韻と元始深山の幽玄興味と併視せば実地目睹者に非されハ共ふ語るべからず世人一の瀑を視る者動もすれハ二三の滝を見〻と聞くべされハ二三の瀧ハ図に見るものの如〻也を三瀑を見ず唯一の瀧の落ちるを見きゝ〻先ッ安数と誇言せべき分節見取図を畧作一の談柄に供せ〻〻冒険とこき入ぶ事と追懐に止まべ帰来一詩を戯賦せ

懸河千丈萬山振。雲霧去来靈又神。瀑素絶同同富嶽。何潜深遂秘天真。

那智一の瀧

同
三の瀧

同
二の瀧